

第27回 鰹が乗ってくる海の流れと日本人の関係

1 「勝男武士」と「カツオの一本釣り」

「目に青葉 山ホトトギス 初鰹」

この連載ではすでに「鰹」と「粹」ということに関してお話しましたが、やはりこの時期になると「鰹」が気になります。私などに関して言えば、風俗や文化、または「粹」ということよりは、純粋に「おいしい魚」ということで、どうしても食欲の方が勝ってしまいます。自分で「粹」ということを書いたにもかかわらず、実に恥ずかしいと思いつつも、やはり、「食欲」には負けてしまいます。

しかし、鰹というのは非常に多くの食べ方があります。

刺身だけでなく、焼く、煮る（なまり節など含む）、揚げる（竜田揚げなど）という通常の食べ方ばかりではなく、さまざまな料理の下地となる「鰹節」や、酒飲みにはたまらない「酒盗」などもありますね。また、生で食べるにも「たたき」などの食べ方もあります。その食べ方は、さまざまなバリエーションがあります。

また鰹という魚は、「縁起のよい魚」とされています。戦国時代、天文6年の夏、相模の国の北条氏綱、これは北条早雲の息子です。この北条氏綱が小田原で船に乗って両氏の釣りを見物していた時、氏綱の乗った舟に、何もしていないのに一尾のカツオが飛び込んできた。「この魚はなんという」と北条氏綱が近くにいる武士や舟を操っていた漁師たちに尋ねると、「鰹」ですと答えたといいます。それを見て「何もしないで『勝つ魚』が舞い込んできた。これからの戦は『勝利が飛び込んでくるぞ』」と言って大いに喜んだといいます。この話が小田原城下に伝わり、小田原の軍隊は大いに士気が上がり、確かに次の戦は、北条軍の大勝利に終わったということです。それ以降、北条の家では出陣の折には必ず「鰹」を縁起物として飾るようになったといいます。この「鰹」が、いつでも新鮮なものがあるとは限らず、そのために、徐々に「鰹節」となりました。これは「勝男武士（かつおぶし）」というようなごろ合わせからきているのです。現在でも、結婚式や新しい門出のお祝いや引き出物に「鰹節」が入っていることがあります。これは、この北条氏綱のエピソードに由来するものとされています。

しかし、普段から鰹が「何もしないで船の中に舞い込んでくる」というようなことはあり

ません。通常は「一本釣り」という方法で、鰹を釣り上げます。

鰹は、マグロと異なりリーダーのような魚がなく、多くの鰹が群れで活動します。また、鰹はだいたい時速60キロメートルで泳ぐとされており、また、その力も強いとされています。普通の鰹は、だいたい3～5キログラム。その大きさの鰹が、海の中で60キロで泳ぐのですから、かなりの力が必要です。また、網などでは、よほど強力でなければ、そのような力のある群れを覆うことはできません。

そのためにカツオ漁は「一本釣り」という方法で漁を行うのが最も一般的です。これは勢いよく泳いでいる鰹の中に針のついた糸を投げ入れ、それで鰹をひっかけるようにして一気に引き上げます。しかし、鰹の泳ぐ方向に合わせてひかないとそれはなかなか難しいといわれています。そのために一本釣りは、その勢いと、鰹の泳ぐ方向が必要になります。一本釣りは餌をつけたりするのではなく、潮に流されてくる餌を食べるために、潮の流れに逆らって泳いでいる鰹に対して、その鰹の開いている口に針をひっかけるというもののなのです。しかし、鰹は力が強いので、逆の方向に向いてしまっただけでは、まったく人間の力では歯が立ちません。魚の向きが変わってしまっただけでは、プロの漁師でもどうにもならず「三段目の相撲取りでも歯が立たない」というような言い方をします。

さまざまな食べ方をすることのできる「鰹」ですが、その中で、最も重要なのは「潮の流れ」です。

鰹は、黒潮に乗って流れてきてその黒潮の通りに、動きます。ですから黒潮と親潮の当たるあたり、ちょうど宮城県の金華山沖のあたりが「北限」とされているのです。日本人は、鰹に限らず「黒潮」から様々な恩恵を受けています。今回は、この黒潮について、少し一緒に勉強してみましよう。

2 唱歌「椰子の実」から見える南方からの潮の流れ

「椰子の実」という歌があります。まずはその歌の歌詞を先に挙げてみましょう。

名も知らぬ遠き島より 流れ寄る椰子の実一つ
故郷（ふるさと）の岸を離れて 汝（なれ）はそも波に幾月
旧（もと）の樹は生（お）いや茂れる 枝はなお影をやなせる
われもまた渚を枕 孤身（ひとりみ）の浮寝の旅ぞ
実をとりて胸にあつれば 新なり流離の憂（うれひ）
海の日沈むを見れば 激（たぎ）り落つ異郷の涙
思いやる八重の汐々 いつれの日にか故国（くに）に帰らん

この歌は、島崎藤村が1901年（明治34年）8月に刊行された詩集「落梅集」に発表した詩として有名です。この詩に、昭和11年当時NHKで放送中であった『国民歌謡』の担

当者が作曲家の大中寅二を訪問しこの詩に曲を付すよう依頼し、曲を付けたといわれています。そして文化庁や日本PTA全国協議会などで選定した「親子で歌いごう日本の歌百選」に選ばれています。

さて、この歌の歌碑が、実は愛知県渥美半島の最西端である田原市日出町にあります。実はこの歌は島崎藤村の経験で作られたものではありません。また島崎藤村がこの歌の中身の想像力を発揮したものでもありません。実は、この歌は、民俗学者で「遠野物語」で有名な柳田国男が、1898年（明治31年）の夏、1ヶ月半ほど伊良湖（いらご）岬に滞在した折、たまたま海岸を散歩していた時に、椰子の実を見つけたエピソードがあり、その話を後になって島崎藤村に語ったことによって創られたのです。要するに、島崎藤村が柳田国男の体験談や心の動きを詩にした、というところでしょうか。ちなみに、先に挙げた「椰子の実」の歌碑も、柳田が椰子の実を目撃した伊良湖岬の恋路ヶ浜から東へ約1キロメートル、「日出の石門（ひいのせきもん）」という洞門付きの巨岩を望む展望台に建てられています。歌碑の傍らには、当時はなかったと思う椰子の木が植えられ、向かい側には曲碑が置かれています。当時からここに椰子の木があれば柳田国男といえども、海上の道を思いつかなかっただしょう。

柳田は『海上の道』1947年（昭和27年）という論文の中で、その経緯を次のように説明しています。少し長いですが、そのまま抜き出してみましょう。

「私は明治三十年の夏、まだ大学の二年生の休みに、三河の伊良湖崎の突端に一月余り遊んでいて、このいわゆるあゆの風の経験をしたことがある。（中略）今でも明らかに記憶するのは、この小山の裾を東へまわって、東おもての小松原の外に、舟の出入りにはあまり使われない四、五町ほどの砂浜が、東やや南に面して開けていたが、そこには風のやや強かった次の朝などに、椰子の実の流れ寄っていたのを、三度まで見たことがある。一度は割れて真白な果肉の露われ居るもの、他の二つは皮に包まれたもので、どの辺の沖の小島から海に泛んだものかは今でも判らぬが、ともかくも遙かな波路を越えて、まだ新らしい姿でこんな浜辺まで、渡ってきていることが私には大きな驚きであった。

この話を東京に還ってきて、島崎藤村君にしたことが私にはよい記念である。今でも多くの若い人たちに愛誦せられている『椰子の実』の歌というのは、多分は同じ年のうちの製作であり、あれを貰いましたよと、自分でも言われたことがある。

そを取りて胸に当つれば

新たなり流離の愁ひ

という章句などは、もとより私の挙動でも感懐でもなかったうえに、海の日沈むを見れば云々の句を見ても、或いは詩人は今すこし西の方の、寂しい磯ばたに持って行きたいと思われたのかもしれないが、ともかくもこの偶然の遭遇によって、些々たる私の見聞もまた不朽のものになった。」（仮名遣いなど原文まま）

柳田国男は、この論文などを含め「海上の道」において、日本人の起源を椰子の実のように南方より海をわたってきたのではないかということを考え、検証していました。大学時代の記憶をもとに、その違和感から「海上の道」を思い浮かべるなどは、やはり柳田国男が民俗学の大家であったことを示すものであると思います。しかし、黒潮に乗って、日本人の祖先が南方から来たとしてもおかしくはないのです。日本人は、そのように、海流ということをよく考えていたのではないのでしょうか。

3 和歌の中の海は「潮」という「荒々しく不安定」を示す言葉になっている

しかし、逆に言うと、柳田国男まで日本では南方からの海流をあまり意識していなかったということになります。少しそのことを考えてみましょう。

万葉集などを見ると、「海」「黒潮」というようなことはあまり詠まれていません。そもそも、和歌が貴族の文化、それも奈良や京都という「内陸」の文化であることから、あまり海に対するしっかりとした知識も、また生活に近い馴染みもなかったのではないのでしょうか。しかし、これが「潮」ということになれば、急に変わってきます。寄せては返す潮の満ち引きなどは、やはり「うたかた」の儂さを感じさせることがあります。また、海というのは自分たちの力ではどうにもならないので、その、自分の思い通りにならないということを様々に例えて歌っているものがあります。

万葉集の中で、有名な歌を2首見てみましょう。

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

これは額田王の歌とされています。斉明天皇の時に、日本と親しかった半島の国家である百済が新羅と唐の連合軍に攻められてしまいます。この時に百済は日本に支援を求めてきました。この支援要請を受けて、斉明天皇と中大兄皇子は軍を出し、百済救出に向かいます。その途中、今の愛媛県松山市の塾田津（にきたつ）に滞在し、舟をこぎ出すタイミングを図っていた時の歌といわれています。この軍には額田王も従軍しており、九州に向かっていました。気ばかり焦って、なかなか天候が整わないもどかしさをうまく歌った歌とされています。そして、結局百済は滅びてしまうのです。天皇や中大兄皇子が一緒でも潮の流れまで整えることはできない、運命には逆らえないということを歌った歌として有名です。

もう一首

潮騒に 伊良虞の島辺 漕ぐ舟に 妹乗るらむか 荒き島廻を

これは、柿本人麻呂の歌といわれています。持統天皇が伊勢を旅されているときに、その持統天皇を思って、柿本人麻呂が詠んだ「恋歌」といわれています。実際に、柿本野人麻呂

と持統天皇がどのような関係であったかはよくわかりませんし、持統天皇に仕えている別な女性のことを歌っているのかもしれませんが。この歌の内容は、「潮騒が聞こえる伊良真島の周りを、あの女性も船に乗って回っているのであろうか。あんなに荒い潮の流れの中を」というような内容であり、その潮の流れの激しさと船の危うさを心配しているだけでなく、潮の荒々しさと、その舟が潮にもてあそばれる姿を「潮騒」と「心の胸騒ぎ」にかけてうまく詠んでいるとされています。

このように、潮というような形で、海には関心がありましたが、その海からの恵みや、南方から魚や漂流物が来るといったようなことは、あまり考えられていなかったようです。海そのものの変化や、潮の流れの荒々しさという、感情やあるいは擬人化できる内容が主に珍重されたようです。

4 古代日本の理想郷は西と東にしかなかった

では、万葉に歌を詠んでいた人や、平安時代の人はなぜ「黒潮」にあまり興味を持たなかったのでしょうか。もちろん、日本の捕鯨の歴史などを見れば、昔から土佐国や紀伊国では、捕鯨なども行われており、潮の流れを読むような漁師も少なくなかったと思います。大きなクジラをとるので、「黒潮」を読んでいたかどうかは別にして、南の方から様々なものが来るということはわかっていたのではないのでしょうか。

しかし、そのようなことはあまり書かれていません。和歌や俳句で詠まれていないというのは、それだけ、「黒潮」の流れや南からくるということに関して、あまり意識していなかったということになります。

実は、ここには「西方浄土」という事と「蓬莱山」というような思想があり、「東西」には様々な感慨を含みますが、あまり南北には大きな関心を示さなかったというような感覚があります。

西方浄土とは、人間の西の方に浄土があるというような感覚です。これは、古代の生活の中で、日が昇ってから生活をはじめ、そして日が沈んでから寝るといった生活をしていると強く感じるものです。日が沈み、そののちに「夜」要するに「神のいない世界」とか「百鬼夜行」といわれる魑魅魍魎の時間がやってきます。その時に、人が住んでいる場所から神々は「光の世界」に帰ってしまうというような感覚になるのです。ではどの道を通って帰るのでしょうか。これは、「水」に映る夕陽の「帯状の光の道」を通って帰るとされます。光の道ですから道は見えますが、水の上なので、人間が通ることはできません。道があるのに人間が通れないということから、「神々が通る道」とされており、その道の進む先、ちょうど水に沈む日の光の中の世界に神々が帰ってゆくと考えたのです。

神々は「光の中に住んでいる」という思想は、まさに、中尊寺金色堂など、神々や仏を表すときに、金を多用しているということによくわかります。金色堂などに行けば「光の世界の中を、この世にいるうちに再現した」ということが書いてあり、当時の人が「光の中に神

の世界がある」と信じていたことが良くわかります。

一方、「蓬莱山」とは、『丹後国風土記』という、浦島太郎伝説の元となったといわれる文章の中にもあります。この文章の中では「蓬莱」と書いて「とこよのくに」と読ませています。「とこよのくに」とは、通常は「常世の国」と書かれることが一般的で、遠く海の先にある異世界で、一種の理想郷と考えられていました。不老不死や永久不変、若返りというような理想郷で、いつまでも若いまま豊かでいられるというようなところと考えられています。中国では、最古の地理書「山海経（さんがいきょう）」の「海内北経」に、「蓬莱山は海中にあり、大人の市は海中にあり」と記されていて、現在の山東省に、その伝説から名づけられた山があります。しかし、秦の始皇帝に「蓬莱山に行って不老不死の妙薬を作り出せ」と言われた徐福は、中国本土にはなく、日本の富士山を「蓬莱山」と思って日本にわたってきたという伝説があります。今でも富士宮市の神社に「徐福の碑」と伝えられるところが残っています。

日本でも『竹取物語』に、「東の海に蓬莱という山あるなり」と記され、また、平安時代に、僧侶の寛輔が、「蓬莱山」とは富士山を指すといっています。いずれにせよ「東方」の霊山が「蓬莱山」とされており、その上に「不老不死の世界」があると信じられていたのです。この「不老不死」と「海の彼方」が結びついたのが浦島太郎の「竜宮城」です。海を渡らないと理想郷に行けないということが、いつの間にか「海の中」になり、理想の一つの形が「タイやヒラメの舞い踊り」というようなものになったのではないのでしょうか。

さて、なぜ南北はあまり意識されなかったのでしょうか。

いや、これは、意識されなかったのではなく、天皇が北、臣下の者が南に座るという状況から、南北に関しては「宮殿内の上下関係」が存在していたのです。そのために「その奥」に何らかの理想郷があったとしたのは、非常に不都合であり、上下関係に関係のない「東西」の果てに理想郷があったとしたのではないのでしょうか。理想郷は竹取物語では「月の世界」、要するに「夜の闇の中の光」とされるなど、意識して南北にはかかわりがない様にして作られるようになったのです。

5 南の島が意識されるようになった南方幻想と日本人の起源

では、いつから「南方」が意識されるようになったのでしょうか。

当然に、「西方浄土」ということではいいましたが、実は、日本人の中には「西側から先進的なものが輸入される」という意識がありました。このことは中国も同じで「西遊記」という三大奇書の一つは、中華思想の中でありながら、乱れた中国をすくうために仏の国である西方浄土に三蔵法師が妖怪を三匹連れて行くという話です。当然に「先進的な物や考え方」が入ってくる方に人は注目します。

では「南の方から先進的なものが入ってくるようになったのはいつからか」ということになります。まさに、戦国時代、ザビエルがキリスト教を、またポルトガル人が鉄砲を伝えた

あたりからではないでしょうか。ポルトガル人もオランダ人も、またザビエルのスペイン人も、実は日本と同じくらいまたは日本よりも北に位置する国々ですが、日本からすると、南方、フィリピン（ルソン島）、台湾、琉球、そして九州や大阪に来るというように、まさに「椰子の実」と同じようなルートで伝わることになります。そのために「南方の方から来た」という意味を含め「南蛮人」と呼ばれるようになるのです。

江戸時代は鎖国し長崎の出島が海外との窓口になっていましたが、金平糖やそのほかの海外の知識は、まさに、「南蛮渡来」というような言い方になっていたのです。しかし、日本は鎖国をしていたので、国学または儒学、あるいは仏教哲学のようなものが中心であり「南蛮を学ぶもの」は理数系を中心に「蘭学」といわれていました。

その考え方が徐々に根付いたところで明治維新が始まります。まさに「南蛮人と組んだ」薩摩の島津、長州の毛利、土佐の山内、肥前の鍋島が中心になって、江戸幕府を倒し新しい世の中にしたのです。まさに「南蛮人」と呼ばれていた「欧米列強」に追い付け追い越せというのが、日本の目標になったのです。

また、南方というと、日本とは異文化であるというような感覚が少なくないのではないのでしょうか。例えば、明治時代になって様々な人がヨーロッパに留学していますが、その人々の多くは、船で南方を通して、ヨーロッパに行きます。岩倉使節団だけではありません。私書いた、庄内藩幕末秘話の酒井忠篤・忠宝兄弟も、また、日本海海戦で活躍する東郷平八郎もヨーロッパに留学しています。その人々が目にした南方の姿は、日本とは全く違う文化を持ち、その文化と人の安穏とした雰囲気伝えます。

そのような中、1900年（明治33年）、後に南の島ブームの原点とも評される押川春浪が、『海島冒険記譚 海底軍艦』が発表されます。この作品は当時の少年を熱狂させ、南方ユートピアブームが生まれます。まさに、南方の絶海の孤島に宝があったり、隠された秘密があり、その宝や秘密を求めて、冒険をするというような、今までになかったストーリー展開は、フロンティア精神、冒険心を大いにかきたてた作品として有名です。

そして、その後、戦中に書かれたジェームズ・チャーチワード著の『失われたムー大陸』と『ムー大陸の子孫たち』が、仲木貞一の抄訳によって『南洋諸島の古代文化』という形で出版されると、ムー大陸という謎の大陸がより一層冒険心を掻き立てるようになります。「南方に何かある」というロマンが、大人までも魅了するようになります。

これらの「ロマン」から「南方」というのは具体的に国の名前などを挙げる必要もなく、「何か新しい、ロマンを感じさせる先進的なもののあるところ」というような、日本人特有の感覚を生みます。現在でも、南方の島に行くと「開放的になる」という人がいますが、まさにこの南方に対する日本人の感覚に基づくものではないでしょうか。

さて、最後に、柳田国男の言う日本人の起源はいかがでしょうか。実際に、稲の伝播のルートなど、南方の国の道を伝わってきたとすることは非常に強くあります。また、日本人の起源として騎馬民族説がありますが、そもそも騎馬民族であったとして、そのような神話が全く残っていないというのはいかがなものかとも思います。実際に、伊邪那岐命と伊邪那美

命は、「国を産む」ということからスタートしており、古事記のはじめは海とは切っても切れない状態になっています。蛭小島は、海に流してしまう、まさに、海流を意識しているのです。

このようなことを考えれば、柳田国男の説にも一層説得力があるのではないのでしょうか。

まだまだ、日本人の起源に関しては、研究が進んでおり、さまざまな説があるのです。もちろん、南方にロマンを感じるならば「ムー大陸から移民した」などというような説があっても面白いかもしれません。ただ、そのような日本人の起源よりも、まずは、今残っており、そして、今忘れられそうになっている今の日本文化を感じてみて、そのうえで、日本との違いを感じていただけると、さまざまな、今まで見えなかったことが見えてくるのかもしれない。